

私が通った幼稚園・保育園(3)

思い出の味いろいろ

宮里 暁美

鬼に追いかけれ追いつめられ、両手をギョツとつかまえられた。

相手は力の強い男の子。ジリジリと後ずさりする私。背中は壁に押しつけられ、もう後には下がれない。絶体絶命のピンチ。

その時、どういうはずみだったのか、ぐるっと半回転して相手と自分の位置が入れ替わってしまった。押されていたはずの私が、気が付いたら相手を壁に押しつけていた。

「あれ？　これってどういうこと？」。互いにそう思った瞬間、私は相手の手を放し、一目散に陣地へと逃げ帰っていた。

幼稚園の頃を思い出すと、いつも思い出す遊びのシーンだ。

ひよんなことから立場が逆転というのが面白くて、そんなことってあるんだ！ という驚きとともに、ずっと心に残っている。おとなしい女の子でも、ちよつとしたはずみで強い相手をかかわすことができるということに、うっすらと気付いた瞬間なのかもしれない。

### のどかな町の、のどかな幼稚園

私は、静岡県清水市で生まれた。

家の前には田んぼがあり夏になれば蛍が飛び交っていた。ロバのパン屋さんがパンを売りに来ていた。湧き水が道や生垣などいろいろな所から湧き出ていた。目をつぶると、断片的に情景が次々に浮かんでくる。

夏にはよく台風が上陸した。台風接近の情報が入ると、早々と雨戸に板が打ち付けられた。台風が来ると何日も家に閉じ込められるということが予想され、子どもたちは、おやつを買いに行かされた。私は、動物の形の塩辛いビスケットのようなお菓子が好きで、たくさん買い込んだ。夜、停電に備えてロウソクを用意し、枕元には、おにぎりや大量のおやつが置かれていた。ロウソクの光がゆらゆら揺れて、非常時なのにワクワクしてしまふ子どもだった。



家のすぐそばまで幼稚園の通園バスが来ていて、私は、そのバスに乗って幼稚園に通った。泣き虫で母親のそばで甘えてばかりの子だったけれど、一人でバスに乗って幼稚園に行かれるくらいには独り立ちしていたようだ。

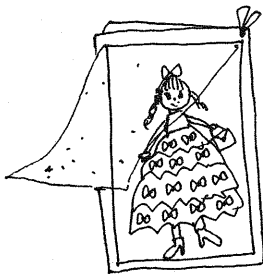
私が通っていた秋葉幼稚園は、お寺の幼稚園だった。昭和三〇年代後半は、園児がどんどん増えていった時期で、幼稚園は増設につぐ増設だった。

幼稚園は音楽に力を入れていたようで、昼食時には、クラシックの音楽が流れていた。家の食事風景と、それは大きく違っていて、「幼稚園ってすごいなあ」という印象が残っている。ピアノも保育に取り入れていた。ピアノの音は少しも覚えていないけれど、ピアノを赤ちゃんに見立てて布にくるんで抱きかかえ、お母さんごっこをしたことを覚えている。斜めに抱きかかえたピアノの重さが、赤ちゃんにびったりだった。

### 誕生カードは宝物

幼稚園の誕生会では、お祝いのカードをもらった。そこには、写真と自分が描いた絵、インタビューへの答えと先生のコメントが書かれていた。

「大きくなったら何になりたい？」というインタビュー



で、私は、四歳の時はお花屋さん、五歳の時は幼稚園の先生と答えていた。先生は、きれいな字でお祝いのメッセージを寄せてくれて、私は繰り返しこのカードを見るのが好きだった。

クレヨンで描いた絵の上には、薄い紙がついていてカードが汚れないようになっていた。薄い紙が上についているのが特別な感じがして、パラパラッと音のなるその紙をそつとめくると出てくる自分の絵も、何か特別な絵のように思えた。この誕生カードは、大切な宝物になっている。

### 困ったこと

幼稚園の頃のことを思い起こしていくと、楽しかったことより、少し困ったことや驚いたことが浮かんでくる。冒頭の鬼ごっここのシーンは驚いたことの一つ。困ったことのも思えばいくつもある。

外で遊んでいて時間が経つのを忘れて部屋に戻ったら、みんながもう集まっていてハイモニカを吹いていたことがあった。

その時、私は、裏庭のようなどころに友達と二人で入り込んで遊んでいた。どれくらいの時間が経ったのか、気が付くと、空気が違う感じになっていた。

「あれ、おかしいぞ」と周りを見回すと、さっきまでたくさんの方達でにぎわっていた

園庭に、人影がまったく無い。あわてて園舎の方に駆け戻り、そっと窓から中をのぞいたらもうみんなが集まっていた。びっくり！ という感じで友達と顔を見合わせたことを覚えている。

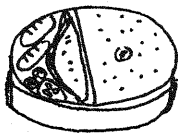
悪気は何も無くて、ただ時間が違う風に私と友達の周りには流れていたただけだった。その時、先生はどうしたのだろうか？ 叱られたという記憶が何もない。

絵の具で絵を描いている時に水をこぼしてしまったこともある。その時も、叱らずに、先生はこぼしてしまった水を一緒に拭いてくれたような気がする。やさしい先生だった。幼稚園を修了してからも、数年間年賀状のやりとりをしていた。ある年、先生の苗字が変わっていて、結婚して東京に引っ越したと書かれていた。その知らせを読みながら、母が「いい先生だったものね」「幸せね」と繰り返し言っていた。

私の中で、「やさしい先生」「結婚」「幸せ」という三つがしっかりとつながっていき、それが、その後の私の歩みに影響を与えたのかどうかは、定かではない。

### 塩辛い思い出

友達とのことでは、心にズキンと残っていることがある。お弁当のことだ。



幼稚園では毎日お弁当を食べた。ある日のこと、同じ机で食べていた友達の弁当に塩

鮭が入っていた。少し小さくてピンク色の塩鮭を、友達はとてもおいしそうに食べていた。「おいしそうだなあ」と思った私は、母に塩鮭をお弁当に入れてほしいとねだった。

数日後、あこがれの塩鮭入り弁当を持ち、私は意気揚々と幼稚園に行った。

いよいよ昼ごはん。弁当箱のふたを開けた時も、私はうれしくて、きつとニコニコしていたと思う。おいしく食べ始めたその時、思いもかけない一言が聞こえてきた。

「真似したでしょ！」

「え？」と言って顔をあげると、そこにはちょっと冷めた目で私を見る友達顔があった。真似をしたのはその通りなので、言い返すこともできず、私はうつむいてお弁当を食べ続けた。友達はそれ以上何も言わなかったけれど、ちよつぱりしよつぱさを増した塩鮭の味とともに「真似をすることは恥ずかしいことだ」という思いが、私の中に強く残った。

友達は、やさしくもあり、きびしくもあった。

左利きの私に対して、母も先生も無理に右手に箸を持たせようとはしなかった。ところが、親切な友達は私をそのままにしてはおかず、「だめなんだよ」「右手にすれば」と注意したり、時には「がんばって」と励ましたりしてくれた。私は、そう言われるとしかたなく右手に箸を持って食べていた。

「どうして左手で食べてはいけないの！何かおかしい！」という思いが沸き起こり、

「私は左手で食べるからいいの！」と友達に言えるようになったのは小学校の中学年になった頃だった。

### 甘い記憶

幼稚園の帰りの時間。私たちは先生の周りに集まった。大好きな肝油ドロップが配られる時間だった。

表面に砂糖の粒々がついているゼリー状のドロップは、甘くてとてもおいしかった。口の中に入れて、ゆっくりその粒々を味わう。噛んでしまうとあつという間に終わってしまうので、慎重な行動が必要だった。口をつぐみ、誰も一言もしゃべらず、目だけで「噛まないだよ」「ね」「おいしいね」と語り合った。

小学校の思い出というと「脱脂粉乳」になるのに比べて幼稚園の「肝油ドロップ」の思い出は甘くなつかしい。最近「肝油ドロップ」を見つけてさっそく買ってみた。口に含んだその味は、かすかに昔の面影はあるけれど、全く違うものだった。

幼稚園という場所でたくさん遊んだ後に、やさしい先生から一粒ずつ配られたドロップは、特別の味だったのかもしれない。

(東京都練馬区立光が丘さくら幼稚園)

